

脳波検査における賦活法の有用性

◎望月 遥¹⁾、鈴木 菜摘¹⁾、若松 翼¹⁾、西山 真澄¹⁾、山口 賢¹⁾
国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター¹⁾

【背景】てんかん診療において、脳波検査はもっとも重要な検査のひとつである。診断の決め手となるてんかん性放電やてんかん発作の出現率の向上には、脳波賦活が重要であることが知られている。

【対象・方法】令和3年4月～6月に、当院てんかん科初診外来を受診し、脳波検査を施行した患者169人（0歳～87歳、男性100人、女性69人）を対象とし、開閉眼・光刺激・過呼吸・睡眠の各賦活によるてんかん性放電の出現、てんかん発作の出現、てんかん類型との関連について調査した。

【結果】検査中にてんかん性放電の出現を認めた98名のうち、賦活時のみでてんかん性放電が出現した患者は33名であった。このうち30名が睡眠中（全般てんかん7名、焦点てんかん20名、その他の診断3名）、3名が光刺激でてんかん性放電の出現を認めた（全般てんかん2名、その他の診断1名）。覚醒時記録でのみでてんかん性放電の出現を認めた患者は9名（全般てんかん1名、焦点てんかん5名、その他の診断3名）であった。また、検査中にてんかん発作

を生じた患者は5名（全般発作1名、焦点発作4名）で、このうち3名は睡眠中に焦点発作を生じた。

【考察】約1/3の患者では賦活下でのみでてんかん性放電が検出されており、賦活時脳波を記録することはてんかん性放電の誘発、てんかん発作の誘発にきわめて有用であった。睡眠賦活は焦点てんかんで、光刺激は全般てんかんで有用性が高いことが示唆された。患者やてんかん類型によって、てんかん性放電やてんかん発作の出現頻度や出現しやすい状況は異なるため、脳波検査では賦活法を含めた覚醒から睡眠までを記録することが重要である。各種賦活法を含めた十分な脳波検査を行うことにより、てんかん性放電やてんかん発作を記録し、その検出率を向上させることは、患者の臨床診断に大きく寄与すると考えられた。

連絡先__054-245-5446